

---

1 2 2 4

ヒガシ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

1224

### 【Nコード】

N5148C

### 【作者名】

ヒガシ

### 【あらすじ】

彼女を失った佐藤純は、絶望感のなかイブで賑わう街を、たださまよっていた。そこで出会った同級生の女子から語られる真実とは

...

真冬の寒空の下、佐藤 純はあてもなく、ただただ街をふらふらと歩いてまわった。

今日はクリスマススイブということもあり、街は実に華やかであった。純の周りほとんどカップルばかり。普段はなにこともなく道端に並ぶ木々も派手に電飾などで飾られ、道路にそって立ち並ぶ店もセールなどで賑わっている。

しかし、その中を歩く純は周りとは対照的に、寝起きの様なジャージ姿に、ボサボサ頭に無精ひげというあまりに一人浮いてしまっていた。目は虚ろで何処に行くわけでも、ただ廃人のように街をさまよっているだけ…。

まるで、今の現実から逃げるように…ただ純はブツブツと独り言を呟きながら歩いていった。

どれくらい歩いただろう…気が付けば、独り暮らししているアパートの近くの公園へとやってきていた。

手前に滑り台があり、その奥にはブランコと砂場がある小さな公園、全くひとけがなく静まりかえっていた。純は公園の中央に置いてあるベンチに座った。

「……沙織……どうして…」純には同じ学校の同級生の彼女がいた。一週間前までは……。

学校の校庭にある木で首を吊って自殺したのだ…。

彼女は何故自殺したんだろう…？悩みを打ち明けてくれれば…自分が彼女の異変に気付いていれば…彼女が死んでから一週間、純はひたすら自分を責め続けていた…。

「帰るか…」

そう思った時には公園の時計の針は午前0時を指していた。  
ゆっくりと腰をあげ、純はアパートへ戻ろうとゆっくりと歩き出した。

純が公園を出ようとした時だった。

「佐藤くん」

純は自分の名前を呼ばれ、戸惑いながらも声の方へと恐る恐る近寄った。

「…誰？」

そこには、沙織の親友でもあった同じクラスの佐伯 理佳が分厚いコートをはおり寒そうにしながら立っていた。

「佐伯か…久しぶりだな…」

力のない声で純が言う。

「心配したんだよ、あの事件から佐藤くん、ずっと学校休んでるから…」

理佳は純の目を見つめながら言った。

「ごめん…今はそんな気分になれなくて…」

純は、心配してくれていた事を知り少し申し訳なさそうに言った。

「実は…実は、佐藤くん…」

どこか理佳は話すのを戸惑っている様子だ。  
「どうしたの？」

不思議そうに純は理佳の顔を見た。

「落ち着いて聞いてね……」理佳は覚悟を決めたように話し出した。

「実は……沙織が自殺する前の日に電話があっただ……」

驚いた様子の純に対して理佳は話しを続ける。

「沙織……悪戯されたって言ってた……」

一瞬、純の中での時間が止まる。

「えっ、えっ……！？今なんて？」

理佳は泣きそうな声で続ける。

「沙織……泣いてた……私、なんて言っていていいか分かんなくて……」

「誰に？一体誰に……！」

純は興奮を抑えきれず、理佳の肩を強く握った。

「佐藤くん、落ち着いて聞いて……」

「落ち着いてられるか！一体誰なんだ……！？」

純は理佳の言葉も耳に入らない程に興奮しきってしまった。

「い、痛いよ…」

理佳の悲鳴に近い声に、純は我に返った。

「ごめん…」

「私こそ…急にこんな事言っ…私も自分の中だけで止めておくのは辛くて…佐藤くんには知ってもらった方が沙織の為に…」

泣きながら理佳は座りこんでしまった。

「くそっ！俺が、俺がしつかりしていれば…」

純の目からも涙が溢れていた。

「佐伯：お前に当たって悪かった…」

純は座りこんで泣いている佐伯の肩にそっと手をやった。

泣きやんだ理佳はゆっくりと立ち上がろうとしていた。

「ドスッ…」

突然、純の腹部に激痛がはしる。

「うつ！なんで……」

見ると下腹部あたりに小さなナイフが突き刺さっていた。  
そしてさっきまでとは別人のような表情の理佳が目の前に立っていた。

「な……なんでお前……？」

わけが分からず、ただパニック状態で痛みに耐える純を見ながら、  
理佳はその様子を見て不気味に笑っていた。

「その表情、最高ね」

ゴボツと血を吐き、激痛に耐えながらも純は理佳の胸ぐらに掴みかかった。

「お前！……どういう……つもりだ……」

「私はただ、あんたの今みたいな苦痛に歪む顔がみたいだけなのよ」

「くっ……くそっ……お前はどうかしてる！」

純は全身の力が抜けていくを感じ、膝からゆっくりと倒れていった。

理佳は不気味な笑みを浮かべながら、しゃがんで純の顔を見ながら言った。

「最後に教えてあげる。さっき話したのは全部嘘、実は沙織も私が

殺したんだ」

純の目からは、大量の涙が溢れ出てきた。  
もう純の体は、動くことも、喋ることも出来なかった。

純は、かすれゆく意識の中に見た。  
目の前にいる人の姿をした悪魔を……。



**（後書き）**

最後まで読んでいただいております。  
これからもよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5148c/>

---

1 2 2 4

2010年10月13日20時17分発行